
仮面ライダー電王 復活の牙

黒崎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー電王 復活の牙

【Nコード】

N4169D

【作者名】

黒崎

【あらすじ】

一人、生きる理由を失くし自殺しようとする青年がいた。そこへ赤く光る球体が憑依、彼は無事無傷で生きていた。これが、彼らの出会いであり、戦いの始まりでもあった……劇場版仮面ライダー電王俺、誕生！の続編、仮面ライダーガオウ登場！！

プロローグ ・ 出会い ・ (前書き)

出会ってしまった二つの存在。 行き着く先は、過去か？未来か？それとも……

プロローグ - 出会い -

青年「もう…生きる理由なんてない…」

高層ビルの屋上で、一人の青年が呟いた。

彼は自らの命を捨てるつもりらしい。

高さ50メートルを超える、この場所から飛び降りれば確実に死ぬだろう。

それを承知でこの場所に居るのだ。

その光景は人が見れば止めるだろうが、現在この場には彼以外の人間はいない。

自殺するには最高のタイミングである。

しかし、その様子を空から飛来した赤く光る球体が見ていた。

そして次の瞬間、彼は屋上から落下した。

タイミングを窺っていた球体は、彼の身体に憑依し地面めがけて落下していく。

地面は確実にすぐ傍まで迫っていた。

青年「もう死ねる…」

彼はそう思った。

だが、彼の脳裏に誰かが話しかけた。

「俺に代われ」と。

そして遂に、彼は地面に叩きつけられた。

通りがかった人々は悲鳴を上げ、彼の様子を見ている。

だが、何と言う事だろう。

彼は平然と立ち上がり、立ち去ろうとしたのだ。

傍で見ていた人々は驚き、彼に声をかける。

通行人「君?!大丈夫かい?!」

彼は心配そうに青年の肩に手をかけた。

すると次の瞬間、通行人は青年に突き飛ばされていた。

青年は凄んだ声でこう呟いた。

青年「俺に気安く触るな」

驚く人々を尻目に、青年はその場を後にする。

これが彼と奴の出会いだった……………

プロローグ ・ 出会い ・ (後書き)

初めて小説を書きました。

いかがでしょうか？「仮面ライダー電王 復活の牙」は？

初めて劇場の牙王を見た時、素晴らしくカッコいいと思い、このまま終わるのは惜しいと思いました。

そこで、早速小説に登場させました。

ここでの牙王は実体はなく、イマジンと同じエネルギー体（色は赤）となって彷徨っている…という設定です。

果たしてこれからどうなっていくのか？

是非、お楽しみください。

第1話 遭遇（前書き）

良太郎はイマジンを追い、過去の時間へと飛んだ。しかしそこで思わぬ人物と再会する……

第1話 遭遇

ある日、野上良太郎は姉の愛理からお使いを頼まれハナと共に出かけていた。

良太郎「ありがとうハナさん、買出しの手伝いしてくれて」

ハナ「いいよ別に、荷物多そうだし」

事実、良太郎の手には左右それぞれ3袋ずつレジ袋に入った荷物を持っていた。

体力のない良太郎は早くも足元がフラフラである。

モモタロス「おい良太郎、大丈夫かよ？」

頭の中で憑依しているイマジンの一人、モモタロスが話しかけた。

「大丈夫、一人で持てるから……」

しかし、次の瞬間彼は足を躓き前のめりに転んでいた。

モモタロス「お、おい?!」

ハナ「だ、大丈夫?!」

しかし良太郎は

良太郎「だ、大丈夫……」

と、笑顔で返事をした。

だが、転んだ拍子に荷物は周りに散乱していた。

客観的に見たら大丈夫とはとても言えないだろう。

モモタロス「ったく、何やってんだ」

ウラタロス「しょうがないよ先輩、良太郎の運の悪さは今に始まった事じゃないし」

二人目のイマジン、ウラタロスが話す。

事実、良太郎の運の悪さは今に始まった事ではない。

キンタロス「zzzzzz……」

その横で三人目のイマジン、キンタロスがいびきをを上げながら爆睡していた。

テーブルでは、最後に憑依したイマジン、リュウタロスがアルバイ

ト乗務員のナオミと遊んでいた。

モモタロスは呆れてなにも言わなかった。

ハナは「はあ…」と溜め息を出しながら荷物の回収を始める。

良太郎「ご、ごめん…」

ハナに謝罪し、自らも荷物の回収を始めた。

モモタロス「つたく、本当にお前って奴は…」

モモタロスは文句を言おうとした瞬間、その場（デンライナー食堂車）にいたイマジン達全員が強い気配を感じた。

タロウズ「……………！！」

良太郎「みんな？」

「キヤー！」

何処からか大きな悲鳴が響いた。

モモタロス「良太郎、イマジンだ！」

ハナ「良太郎！」

ハナは険しい顔になった。

量太郎「うん！」

良太郎は荷物をハナに任せ、急いで悲鳴が聞こえた方へ走って行った。

イマジン「ふはははは…契約完了…」

イマジンはそう呟くと女性の過去の扉を開き過去へと飛んだ。

良太郎「だ、大丈夫ですか？」

駆けつけた良太郎は女性の身を案じた。

無事を確認すると、ライダーチケットを女性にかざした。

すると過去の時間が表示された。

良太郎はチケットをライダーパスに入れると、

良太郎「モモタロス、行くよ」

と、モモタロスを指名し憑依させようとした。

しかし、デンライナーのイマジン達は戸惑った。

モモタロス「な、何だこの気配?! イマジンの他に…しかも以前何処かで……………」

ウラタロス「そうだね…しかも危険な感じがするよ」

キンタロス「ほんまにヤバイ感じがするで?！」

リュウタロス「この気配、僕嫌い…」

イマジン達は戸惑う中、

良太郎「モモタロス?!」

と、良太郎が話しかけた為、思考が元に戻り、

モモタロス「お、おう!良太郎!」

モモタロスは一抹の不安を覚えながらも良太郎の言葉に従った。

ウラタロス「気をつけてね、先輩」

キンタロス「油断したらあかんで?」

リュウタロス「行つてらっしゃい」

ナオミ「行つてらっしゃい」

三人のイマジンとナオミに見送られ、モモタロスが良太郎に憑依した。

デンオウベルトを装着し、赤のフォームスイッチを押した。

変身待機音が鳴り響く。

M良太郎「変身!」

M良太郎はライダーパスをセタッチする。

「Sword Form」

変身完了の音声が響き、電王プラットフォームに変身。

続いてアーマーが装着され、仮面ライダー電王ソードフォームへと変身完了する。

電王S「よし!行くぜ行くぜ行くぜえ!」

電王は急いでデンライナーに乗り、過去の時間へ飛んだイマジンを追った。

過去の時間。

現在から飛んできたイマジンは町を壊し回っていた。

そこへデンライナーが出現、電王が現れた。

電王S「俺、参上！」

イマジン「き、貴様は電王！」

イマジンが驚いた瞬間、電王はデンガツシャーを組み立てていた。

電王S「おいてめえ、ずいぶん派手に暴れてるじゃねえか？」

イマジン「き、貴様！邪魔をするつもりか？！」

電王S「そんな事どうでもいい、とにかく俺は最初から最後までク
ライマックスだぜ！！」

デンガツシャーソードモードを完成させ、思い切りイマジンを一閃
する。

電王S「喰らいやがれ！」

イマジン「ぐわあ！」

何度もデンガツシャーを斬り付け、イマジンを追いついていく。

電王「行くぜ行くぜ行くぜえ！」

イマジン「ぬおおおお！」

イマジンが防戦一方、遂には電王の攻撃に耐えきれず吹き飛ばされ
る。

電王S「そろそろとどめを指させてもらっぜ！」

イマジン「ぐつ、ぬううう……」

電王がベルトにパスをかざそうとした。

その時、

「Full Charge」

と、必殺技の音声が響いた。

良太郎「え？」

電王S「な、何？！」

すると何処からかノコギリ状の刃が飛来し、イマジンを一瞬で
切り裂き始めた。

これには電王だけではなく、デンライナーのイマジンも驚いていた。
ウラタロス「あれってもしかして……！」

キンタロス「ああ、間違いない！俺らは一度、あの攻撃を受けた事

がある！」

リュウタロス「じゃあまさか…あいつが?!」

刃は獲物に喰らいつく獣のように切り裂いていく。

イマジン「ぐわあああ…!!」

遂にイマジンは断末魔を上げ爆発四散した。

電王S「この気配…まさか?!」

獲物を失った刃は持ち主の元へと戻って行った。

電王はそれを目で追うと思わず目を疑った。

そして…驚愕した。

電王S「おい…マジかよ…?!」

良太郎「そ、そんな……」

電王の眼前にいたもの、それは以前過去に戦い、倒したはずの存在。
仮面ライダーガオウだった。

電王は目の前の存在に、ただ呆然とするしかなかった……………

続く

第1話 遭遇（後書き）

とうとう再会してしまった電王とガオウ。

はたして、再び壮絶な戦いが始まってしまふのか？それとも……と、その前に感想を募集します。

もしこの小説を読んでいただいてる皆さん、この小説のいい点、悪い点を送ってください。

それらを元に、これからも精進していきたいと思います。

さて、次回の物語のタイトルは「理由」です。

どうぞ、お楽しみに。

第2話 理由（前書き）

ガオウが再び現れた事で騒然とするデンライナー。そこへオーナーが現れ、意外な言葉を口にする……

第2話 理由

イマジン「ぐわああああ……！」

遂にイマジンは断末魔を上げ爆発四散した。

電王S「この気配……まさか?！」

獲物を失った刃は持ち主の元へと戻って行った。

電王はそれを目で追うと思わず目を疑った。

そして……驚愕した。

電王S「おい……マジかよ……?!」

良太郎「そ、そんな……」

電王の眼前にいたもの、それは以前過去に戦い、倒したはずの存在。
仮面ライダーガオウだった。

電王は目の前の存在に、ただ呆然とするしかなかった……………

ガオウ「……」

とどめを終え、ガオウはその場から去ろうとしていた。

電王S「お、おい?! てめえ?!」

電王は我に戻り、ガオウを呼び止めた。

ガオウ「?」

ガオウはその場に立ち止まった。

良太郎「ガオウ……」

電王S「てめえ……生きてやがったのか?!」

電王はガオウに問いかけた。だが、

ガオウ「……」

その問いに答えようとせず、再び歩み始めた。

電王S「……何とか言えよてめえ!」

業を煮やし、電王はガオウに目掛けてデンガツシャーを振り上げた。
それをガオウは平然とガオウガツシャーソードモードで受け止める。

電王S「ぐっ……この……!」

ガオウ「……失せろ」

良太郎「え？」

ガオウは刃を滑らせ、電王の身体を一閃した。

電王「うわっ?!」

刃をまともに受け、電王は吹き飛ばされてしまう。

ガオウは電王に振り向きもせず、その場から立ち去っていった。

ガオウが再び現れた事で、デンライナー食堂車は騒然としていた。
ガオウが現れたと聞き、ナオミは怯えていた。

デンライナーをハイジャックされた際、牙王の人質となっていたのである。

傍には心配そうに見守るウタロスとリュウタロスがいた。

モモタロス「ちくしょう!あの時確実に倒したと思ったのによ!」

ウタロス「確かに、僕たちから見てもあれは間違いなく倒したと思うよ」

キンタロス「それなのに…あいつは…ガオウは生きとった!」

リュウタロス「ねえ、何であいつ生きてたの?」

モモタロス「それが解れば苦労しねえよ!」

イマジンたちが話し合っている中、良太郎は考えていた。

良太郎「あの時の声…あれは牙王の声じゃなかった。でも、目の前にいたのはガオウ…」

良太郎はそのまま黙り込んでいると、ハナが話しかけた。

ハナ「良太郎、大丈夫?」

良太郎「うん、大丈夫。もう何ともないから」

ハナ「そう、ならいいんだけど…」

ハナは良太郎を気遣うと再び話し始めた。

ハナ「いったい、何でガオウが現れたのかしら?確かに過去の時間で倒したと思っただけなのに…」

そんな事を口にするともモタロスが話に割り込んできた。

モモタロス「おいハナクソ女！お前まさか俺が手加減したとでも言うんじゃないだろうな？！」

その言葉にハナはモモタロスを睨んだ。

ハナ「そんな事言つてないじゃない！あれは誰が見たって倒したつて思っわよ？！でも現実にあいつは現れたじゃないの？！」

その言葉に、モモタロスは何も言い返せなかった。

事実ガオウは倒され、砂と化し消滅した。

だが実際に生きて電王の眼前に現れた。

その場の全員が黙り込んでいた。

そこへ、

オーナー「もしかすると、別人かもしれないねえ」

と、話しながらオーナーが食堂車に現れた。

ハナ「オーナー！」

モモタロス「おいおっさん！どういう事だよ？！」

ハナとモモタロスはオーナーに問いかける。

オーナー「つまり、良太郎君の前に現れたガオウは牙王ではなかったという事です。」

モモタロス「ああ？！どういう事だよ？」

モモタロスは首を傾げていた。

その時、

良太郎「もしかすると、あのガオウは誰かが変身していたのかもしれない」

と、良太郎が呟いた。

その言葉に誰もが（オーナー以外）驚いた。

ハナ「嘘でしょ？」

モモタロス「何だと？！」

良太郎「あの時、一瞬だけどガオウの声を聞いたんだ。でも、僕の知ってる牙王の声じゃなかった」

ウラタロス「つまり…誰かが何らかの理由でガオウに変身したって事？」

ウラタロスの言葉に良太郎は頷いた。

モモタロス「おいおいマジかよ?!」

再び食堂車に衝撃が走る。

しかし、

良太郎「…でも、あの時ガオウは部下だったはずのイメージを倒してた。もしかしたら、今は僕たちの味方になってくれるかもしれない」

と、良太郎は言った。

だが、

モモタロス「…っけ!そんなの信じられるかよ!」

モモタロスは苛立ちを覚えながらそうはき捨てた。

良太郎「モモタロス…」

モモタロス「俺たちは一度あいつにはひどい目にあって命を落としかけた事がある!そんな奴を信用できるかよ!」

確かにモモタロスの言い分はもつともである。

事実、牙王は良太郎たちと死闘を繰り広げ、神の列車「ガオウライナー」を使い時を喰い尽くそうとした。

この言い分にイメージンたちは納得していた。

しかし、

良太郎「…それでも、僕は信じるよ。もし、また時間を喰い尽くそうとすれば…僕が倒す。」

ハナ「良太郎…」

良太郎の真剣な言葉にイメージンたちは耳を傾けていた。

そして、

モモタロス「…解ったよ!好きにしろ!」

ウラタロス「まあ良太郎がそこまで言うならいいけど?」

キンタロス「もしまた時間を喰い尽くそうとしたら…」

リュウタロス「僕が倒してもいいよね?」

モモタロス「おい小僧!あいつを倒すのは俺だ!」

と、いつものように喧嘩を始めた。

どうやら良太郎に任せる事にしたらしい。

良太郎「ありがとう…みんな」

良太郎はイマジンたちに礼を言くと、ナオミの傍に駆け寄った。
ナオミ「…」

良太郎「大丈夫、もうナオミさんには何もさせないから」

良太郎は笑顔でそういうと、ナオミの顔が明るくなり、
ナオミ「…はい！」

と、満面の笑顔で元気よく返事をした。

そして、デンライナーはいつもの雰囲気に戻っていった……………

再び過去の間。

電王はイマジンと激闘を繰り広げていた。

イマジン「ぎひひひひ！死ねえ電王おお！」

電王S「くそっ！この野郎お！」

武器が激しくぶつかり合い、火花が飛び散る。

そしてイマジンの重い一撃が電王に直撃する。

電王S「ぐおっ?!」

吹き飛ばされる電王。

イマジンは笑みを浮かべながらとどめを指そうとしていた。

イマジン「ぐひひひひ、これで終わりだあああ！」

その時、

「変身」

と何処からか声が響いた。

「Gaoh Form」

と、変身完了の音声が響く。

そして、イマジンの眼前にガオウが現れる。

イマジン「ぎひ?! 貴様はガオウ!」

電王S「なっ?! またあいつ!」

電王とイマジンが叫ぶものの、ガオウは平然とガオウガッシャーを組み立てていた。

イマジン「ちいいい! 無視するなあああ!」

イマ진은ガオウ目掛けて襲い掛かった。

その瞬間、ガオウはガオウガッシャーソードモードを完成させて向かってきたイマジンに一閃する。

イマジン「ぐひいいい!」

攻撃を受け、イマ진은苦しむ。

イマジンを返り討ちし、ガオウはとどめを指そうとライダーパスをバツクルにかざした。

「Full Charge」

音声が鳴り、ガオウの必殺技「タイラントクラッシュ」が放たれた。ガオウガッシャーから鋸状の刃が飛び出し、イマジンという獲物に襲い掛かる。

刃はイマジンに喰らいつき、瞬く間に切り刻んでいく。

イマジン「ぐひやああああ!」

イマジン は断末魔を上げ爆発四散した。

ガオウはとどめを終え、その場から立ち去ろうとした。

そこへ、

良太郎「ま、待って!」

と、変身を解除した良太郎が呼び止めた。

ガオウは良太郎の方へと振り向く。

良太郎は息を切らし、話続けた。

良太郎「君はいつたい誰なの? どうしてガオウに変身してるの?」

すると、ガオウはベルトを外し変身を解除した。

そこに現れたのは、良太郎と年齢が変わらない青年だった。

驚く良太郎。

そして、青年は話し始めた。

俊介「：俺の名前は榊^{さかき}俊介^{しゅんすけ}、生きる理由を探す為に戦ってる。」
突然の告白に、良太郎は息を飲んだ。

続く

第2話 理由（後書き）

どうも、今回の「復活の牙」はいかがだったでしょうか？

ガオウに変身する榊俊介は、牙王の物静かな雰囲気とカイの風貌を合わせて2に割ったような幹事になっています。

登場の仕方、過去の桜井侑斗の登場にガオウからの変身解除を合わせました。

次回から侑斗&デネブも登場する予定です。

さて、ガオウと榊俊介の登場に良太郎たちは？

次回、第3話「存在」、お楽しみに。

キャラクター説明

さかき しゅんすけ

榊俊介 20歳

仮面ライダーガオウに変身する青年。

何故彼がガオウに変身するのは今のところ不明。

以前、ある事がきっかけで彼の運命が変わり始める…。

第3話 存在（前書き）

遂に対面を果たした電王とガオウ。
果たして彼らに待ち受けるものとは？！

第3話 存在

イマジン「ぐひゃあああああ！」

イマジンは断末魔を上げ爆発四散した。

ガオウはとどめを終え、その場から立ち去ろうとした。
そこへ、

良太郎「ま、待って！」

と、変身を解除した良太郎が呼び止めた。

ガオウは良太郎の方へと振り向く。

良太郎は息を切らし、話し続けた。

良太郎「…君はいつたい誰なの？どうしてガオウに変身してるの？」
すると、ガオウはベルトを外し変身を解除した。

そこに現れたのは、良太郎と年歳が変わらない青年だった。

驚く良太郎。

そして、青年は話し始めた。

俊介「…俺の名前は榊俊介、さかき しゅんすけ生きる理由を探す為に戦ってる」

突然の告白に、良太郎は息を飲んだ。

目の前にいる青年が明らかに良太郎や桜井侑斗と年齢が変わらない
若者だったからもあるだろう、良太郎は少なからず衝撃を受けてい
た。

だが、

モモタロス「おい！」

と、その場の空気を考える事もなくモモタロスは俊介に啖呵をき
つた。

モモタロス「てめえ…どういう理由で変身出来るのか知らねえが、
こっちの質問に答えてもらうぜ？！」

良太郎「モ、モモタロス…」

俊介「…何だ？」

俊介は首を傾げる。

モモタロス「てめえは俺達の敵か?!それとも…」

俊介「…さあな」

モモタロス「何?!」

俊介「お前らがどう思おうとも俺の勝手だ、俺の好きなようにやらせてもらう」

良太郎「つまり…僕達と一緒にイマジンと戦わないって事?」

良太郎が切り出した。

俊介「そういうことだ。」

モモタロス「おいちよつと待て?」

ここでモモタロスがひとつ疑問を投げかけた。

モモタロス「とにかく目的さえ一緒なら俺達と一緒に戦えばいいじゃないえのか?」

しかし、この言葉に対しての俊介の反応は、

俊介「…それじゃ意味がない」

良太郎、モモタロス「え?」

俊介「俺は一人で戦い、理由を探してる。誰かに頼るつもりはない」

モモタロス「何だと?!」

俊介「これ以上話しても時間の無駄だ…じゃあな」

モモタロス「お、おい?!」

モモタロスが呼び止めようとした瞬間、良太郎とモモタロスは思わず目を疑った。

なんと過去の時間で破壊したはずの”神の列車”ガオウライナーが出現したからである。

そして、ガオウライナーが通り過ぎた後には俊介の後は無かった。

良太郎「神の列車まで復活していたんだ…」

モモタロス「くっそおお!何がどおなつてんだよおお?!」

良太郎達は突然起こった事態を理解出来ぬままだその場に立ち尽くす事しか出来なかった……………

別の過去の時間

ここでは、桜井侑斗が変身するゼロノスアルタイルフォームと契約しているイマジン、デネブがイマジンと死闘を繰り広げていた。

イマジン「ぎやはははは！死ねええゼロノスうっ！」

ゼロノスA「ぐっ…！」

デネブ「ゆ、侑斗お！」

が、その時

俊介「変身」

と、俊介の声が響く。

そして、

「Gaoh Form」

素早くガオウに変身すると、ガオウガッシャーでイマジンを一閃する。

イマジン「ぎひいいい！」

ガオウの斬撃を受けてイマジンは吹き飛ばされる。

デネブ「お、お前は？！」

ゼロノスA「？！お前…！」

ゼロノスとデネブは驚くがガオウはそれを無視しイマジンに攻撃を続ける。

明らかに実力の差は歴然、すぐにイマジンは窮地に立たされる。

イマジン「ぐううう！貴様ああ！」

「Full Charge」

有無言わず、ガオウは必殺技を放つ。

無残に切り付けられ、悲鳴を上げるイマジン。

イマジン「ぐぎゃああああ！」

断末魔を上げ、爆発するイマジン。

ガオウは当然のようにその場を立ち去ろうとした。

その時、

ゼロノスA「おい！」

と、ゼロノスが声をかけた。

ガオウは振り返る。

ゼロノスA「…野上達から話は聞いてる、お前が新しいガオウなんだってな」

ガオウ「それがどうした？」

次の瞬間、ゼロノスは衝撃的な言葉を口にする。

ゼロノスA「…俺は一度お前に会った事がある」

デネブ「侑斗?!」

ガオウ「?!」

変身を解除し、なおも話を続ける侑斗。

侑斗「あの時、お前は死んだはずだった。そうだろう? 榊俊介!」
そして侑斗の口から衝撃的な真相は語られる……………

続く

第3話 存在（後書き）

どうも、やっと完成しました。

久しぶりに書いたものでどうでしょうか？

桜井侑斗（&デネブ）は俊介に衝撃的な真相を語り始める、いったいそこには何があったのか？！

と、今回は新生ガオウ誕生を軸に物語を進めたいと思います。

もし読んで頂けるなら光栄です。

今まで通りご感想お待ちしております。

さて、今回は「真相」です。

お楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4169d/>

仮面ライダー電王 復活の牙

2010年10月9日12時44分発行